

娯楽空間としての浅草

関 明子

Entertainment space Asakusa

Akiko SEKI

(Received on Dec. 18, 2015)

Abstract

Asakusa is the cathedral town . But nobody feel religious piety from the mood of this town. Rather, everyone would hold the impression which is the town filled by common people's vulgarity in Asakusa. There were small theaters, street performer and street stalls in the town in the Edo Period. I'd like to argue how was the entertainment space formed .

キーワード：集客力，娯楽，居開帳，見世物，外食文化，庶民

1. 序

近世の江戸において、人の集まる町と言えば、日本橋・両国・浅草等が挙げられる。その中でも商業・交通等実質的な必要からではなく、観光や見物のために人々が集まってくる町という点で浅草は特異な性格を持っている。

近世以前にも観光目的の来訪者を迎える場所は存在していたが、それは名所旧跡の類であった。たとえば、山や滝などの自然景観を堪能できる土地、歴史的に名高い建物や古跡といった場所がそれである。

しかし、関東平野は首都機能を持った都市を築くには好都合でも、変化に富んだ風光明媚な土地にはなり得ない。また、新興都市たる江戸に古跡などあろうはずもない。せいぜい隅田川が歌枕や梅若伝説¹で知られていた程度である。

だが、何もないからこそ、そこに新しいものを作っていくことが可能であった。来訪者の多様性に対応する町、娯楽施設的な性格を有する町というのは、近世に始まったのではないかと思われる。

本稿では近世的な観光地たる浅草について考察する。

2. 浅草の集客力

江戸で見物客や観光客の多い町と言えば、両国と浅草が双璧である。両国は回向院²、浅草は浅草寺³を中心に成り立っている。どちらも門前町であり、特に賑わうのは開帳の際であることも同じだが、その開帳の性格はいささか異なっている。

回向院は、延宝三年（1676）京都石山寺如意輪観音の開帳以来、幕末までの間に百六十回以上出開帳の宿寺となっている。これは、ほとんど毎年のようにいずれかの寺院の本尊（前立）を受け入れていたことなる。善光寺など元禄五年（1692）から、文政三年（1820）の間に四回も回向院で出開帳を行っている。もちろん、回向院の本尊である阿弥陀如来が開帳されることもあったが、おそらく、回向院は「出開帳の寺院」と人々から認識されていたであろう。

これに対し、浅草寺は居開帳の多さが目立つ。承応三年（1654）に始まる本尊聖観世音の順年開帳は、三十三年に一度と決められているが、その他に縁起開帳、落成開帳等臨時開帳も行われている。

縁起開帳とは、開山から何年という切のいい年数で行うもので、たとえば、『武江年表』⁴の安永六年（1777）の条に「○三月二十日より六月朔日まで、浅草寺観世

音並びこ境内神仏総開帳あり。開基より千百五十年に及ぶと云ふ」とある。同様に文政十年（1827）にも本尊示現千二百年の開帳が行われている。

落成開帳は文字どおり再建や修復の記念に行われる。元禄五年（1692）には、本堂大修復の落成開帳が九月十八日から三十日間行われている。『武江年表』の寛政七年（1795）の条に「○三月十八日より六十日、浅草観世音開帳、風神雷神門再建成りて三月十日二神を安置す」とあり、これも門の落成開帳と見て差し支えないであろうし、文化四年（1807）八月一日から五十日の開帳も、この年に諸堂修復が終了していることから落成開帳と言える。これらは、順年開帳に匹敵するほどの長期間であるが、なぜか天保十一年⁵（1840）は本堂修復成就であったにもかかわらず、開帳は暫時、正確な日数は不明であるが、長期間ではなかったものと推察される。

ところで、浅草寺は将軍家祈願所としての一面がある。したがって、将軍あるいは将軍世子の参詣もあった。もちろん、どの程度の頻度で浅草寺を訪れるかは、個人差がある。二代将軍秀忠は浅草寺内に東照宮を造営するなど厚遇したが、三代家光は父に対する反発もあって寛永寺を重く扱った。さらに五代綱吉は別当忠運を罷免して、浅草寺を寛永寺の輪王寺門跡の支配としている。江戸時代前期は浅草寺不遇の時代が長く、将軍の参詣も頻繁ではなかったと考えられる。また、その頃は将軍参拝時のみ本尊を開帳し、退堂後は閉帳していた。御成の際の開帳は、祈願者たる将軍に対してのみであった。

その後について、『浅草寺日記』を見ると、江戸時代中期以降は割合頻繁に御成があったようだ。宝暦七年⁶（1757）七月四日に御成御膳所の留書が記されている。「大御所様」（先代将軍吉宗）の参詣は寛延二年（1749）三月の一度のみであるが、「公方様」（九代将軍家重）は世子の頃も含めれば十三度、「大納言様」（世子家治）は七度既に御成があった旨記録されている。吉宗については、享保十八年（1733）にも参拝した記録があるので「壹度ニ而」というのは大御所になって以降一度という意味であると思われる。

吉宗以降は御成跡開帳と言って、将軍や世子が参拝した後に一般の参詣者にも開帳参拝を許すようになる。日数については特に定めはなく、享保十八年は将軍参拝日を含めて八日間、元文二年（1737）は世子参拝の五日後から三十日間であった。その後も先例として、享保・元文の開帳はしばしば取り上げられるが、必ずしも先例に倣ってとはならず、一日で閉帳するごく短い開帳も少なくなかった。回数が多くなれば、一回あたりの日数が少なくなるのはやむを得ないところであ

ろう。

このように順年開帳と臨時開帳を併せると、単純計算すれば、浅草寺は居開帳だけで、少なく見積もっても三年に一度くらいは厨子を開いていたことになる。

さらに言えば、開帳のほかにも四万六千日⁷や縁日⁸のような行事もあるのだから、浅草寺は江戸のイベント・スポットであった。また、参拝する対象も本尊たる観世音のみではない。『江戸名所図会』の挿絵によれば、「かしま⁹」「秋葉¹⁰」「弃天¹¹」「大神宮¹²」「妙けん¹³」「出世大こく」「不動」「ゑびす」「地主いなり¹⁴」「いたてん¹⁵」「山王¹⁶」「被官いなり¹⁷」等、多彩な神仏が祀られていることが分かる。他の力を借りずとも浅草寺一寺で催事が可能なのである。行事・神仏いずれから見ても、文化的、宗教的な意味での自己資本力の高さが浅草寺にはあった。

3. 奥山

前述したように、浅草寺は純粋に宗教施設としての集客力も十分に持ち合わせていたのであるが、いつの間にか浅草を訪れる楽しみは寺社参拝だけではなくなっていた。

息抜きにもっと気楽な楽しみもほしい、そのように思うのは庶民ばかりではなかったようである。『浅草寺日記』明和七年（1770）四月四日の条に次のように記されている。

大納言様浅草筋御成之節御覽物
一曲こま回し 一ひいとろ吹
一楊弓 一草木植木
一小鳥 一扇子折
一造り花 一吹矢

明和七年ならば十代将軍家治の治世であるから、大納言たる将軍世子は家基、権大納言といっても満年齢で七歳の少年である。参詣は外出のための方便で、本人にとっては、むしろ本堂を出てからが本来の目的なのであろう。曲独楽廻し・植物・小鳥・造花等を見物している。

家基は将軍になることもなく二十歳前に夭折しているので単独での参詣はこの一度のみであったようだが、その父である家治は将軍世子であった頃に五度も単独で浅草寺を訪れている。十代の少年の信仰心が厚かったとも思われないので、これもやはり参詣後に何らかの楽しみがあつてのゆえと考えるのが自然である。

『江戸名所独案内¹⁸』に「奥山で大道芸などが行われる。境内ひろく奥山に見せもの等ありて常ににぎはふ」と記されている。浅草寺の西側一帯は「奥山」と呼ばれていたが、この地はいつの頃からか世俗的な賑

わいを見せていたようだ。

『武江年表』明和元年（1764）の条に「○四月十八日より六月八日まで、江戸浅草寺観世音開帳。この間奥山に様々な見世物が出る」とあるので、最初は開帳や諸行事に合わせて見世物師や芸人が集まってきたのであろう。しかし、明和七年の家基の参詣の際は、別段何か行事がある日でもないの、この頃の奥山は既に盛り場の様相を呈していたことになる。もちろん、見世物等は葎簀張りの小屋掛けであるから、常に同じ出し物が並ぶわけではない。また、開帳や諸行事の折には、参詣客を目当てに常以上の数の出し物が連なっていたであろうことは想像に難くない。

その時々で出し物は違っていたが、奥山は常に複数の見世物でにぎわっていた。『武江年表』や『遊歴雑記』によれば、丸竹細工・麦藁細工・貝細工・ギヤマン細工のような細工物、曲独楽・曲てまり・曲馬のような芸、あるいは外国の動物等、その内容は多彩であった。

それらを見物する客のほうもまた多彩で、もちろんごく稀なことではあるが、幕末には外国人も訪れて見たものを記録に残している。

たとえば、プロイセンの外交官オイレンブルク伯爵¹⁹は、万延元年（1860）に浅草を見物しており、「寺院それ自体は、広い平野の中に孤立して建っているが、その木立の下には、あらゆる見世物小屋がつくられている²⁰」と書き残している。その時奥山に出ていたものは「曲芸、動物の見世物、芝居小屋、人形芝居などがあるが、中でもわれわれの目をひくと思われるものは、大きな蠟細工陳列場²¹」だそうであるが、実はオイレンブルクが蠟人形と見たものは、素材は蠟ではない。安政年間から大変な人気を集めた活人形で、素材は紙糊である。

『武江年表』によれば、奥山に活人形が登場したのは安政二年（1855）二月のことである。この時も八十日間もの長きに亘って開帳が行われていた。この活人形は、上方で当たりを取ったので江戸に進出してきたものである。

肥後国熊本なる松本喜三郎といふ者造る所なり。
木偶にあらず泥塑にあらず、紙糊のものと云ふ。
手長島、足長島、穿胸国、無腹国其の外異国人物、
丸山遊女の偶人等多く、男女とも活ける人に向ふ
が如し。

江戸でも活人形は大当たりを取り、この後は毎年のように奥山で見られるようになる。翌年には、再び松本喜三郎作の六十二体もの人形が展示されている。さらに次の年には秋山平十郎作の人形、安政六年（1859）には、同じく平十郎作だが竹田縫之助によってゼンマイ仕掛けを施されたものが評判になっている。オイレ

ンブルクが訪れた万延元年は、喜三郎と平十郎、両方の活人形を見物することができた年であった。

活人形を中心とした奥山の賑わいはその後も続く。慶応元年（1865）に来日したシュリーマン²²も、自身の旅行記でその様子を語っている。

浅草観音の広い境内には、ロンドンのペイカーストリートにあるマダム・タッソーの蠟人形館によく似た生き人形の見世物や茶店、バザール、十の矢場、芝居小屋、独楽廻しの曲芸師の見世物小屋等々がある。かくも雑多な娯楽が真面目な宗教心と調和するとは、私にはとても思えないのだが。²³シュリーマンの記述から、幕末には浅草寺境内町は町場としての発達を遂げており、浅草寺自体は宗教施設ではあるものの、浅草は見世物、矢場、芝居小屋と多様な娯楽の町として進化していたことが窺える。

前述したような猥雑な娯楽だけでなく、嘉永五年（1852）には、季節の花を楽しむ施設も登場する。『武江年表』に次のような記述がある。

○春の頃より、浅草寺奥山乾の隅林の内六千余坪の所、喬木を伐り梅樹を栽へ、また四時の草木をも栽へ、池を掘りて趣をなし、所々に小亭を設く。
夏に至り成就し、六月より緒人遊観せしむ。（千駄木植木屋六三郎の發起なり）

これは植木茶屋と呼ばれるもので、「浅草奥山花やしき」と題して広重の浮世絵にもなっている。それまでは、どちらかと言えば静かでゆとりのある時間を過ごせる店や催しの少なかつた浅草が、さらに客層を広げるに至ったのである。この茶屋は園内の園芸植物を鑑賞するだけでなく、「広々とした平野を遠くまで見渡せる」造りであったとオイレンブルクは述べている。

4. 買い物と飲食

長時間一つの場所で過ごす場合、当然食事が必要となる。文政七年（1824）刊行の『江戸買物獨案内』に掲載されている名店だけでも、料理屋十一軒、蕎麦屋四軒、奈良茶飯屋二軒、鰻屋二軒、汁粉屋二軒（ただし、本店と出店）、寿司屋、菜飯屋、茶屋、茶漬屋各一軒が浅草にあった。さほど評判になってはいない店や開店したばかりの店は載っていないのだから、実際に営業している飲食店は何倍もの数であったはずである。特に奈良茶飯²⁴などは江戸の外食文化の先駆けで、しかも浅草から始まったものであり、料理屋でも奈良茶も出せることがセールスポイントになったのだから、無名の奈良茶飯屋は相当の数に上ったと推測される。

一軒一軒は名店というものではないが、境内の二十軒茶屋の存在も有名である。これは伝法院付近に並ん

でいた水茶屋の総称で、最も多い時期には三十六軒あったので、三十六歌仙に因んで歌仙茶屋とも呼ばれた。天保の頃には十軒ほどに減っていたが、そのまま二十軒茶屋と呼ばれ、明治まで続いた。参詣者は時代が下るに従って増加傾向にあったため、茶屋は数こそ減ったものの、奥に座敷を持つ店もあり、講中の集会所としても用いられるようになり、次第に料理屋に準ずる料理茶屋へと変貌を遂げていく。

この二十軒茶屋が軒を連ねていたのが、現在の仲見世の半ば辺りである。この仲見世は、貞享二年（1635）に、境内清掃を課す見返りとして浅草寺が近隣住民に開業を許可した商店街で、雷門から本堂に伸びる表参道の両側に軒を連ねている。直線的に伸びた参道の両側に店が、しかも境内に立ち並ぶというのは、非常に印象的な光景であったようだ。オイレンブルクは「入口の鳥居から本堂に至るまでの道の両側は、ずっと茶店や年の市の露店が連なっており、巡礼者に何千という種類の品物を売りつけている」²⁵と記述し、シュリーマンは「門から長く美しい道が一本、寺の入口の扉までのびている。大通りの両側に店が立ち並び、一種のバザール形式をとって」²⁶いと描写している。近世後期には、現在とほぼ同じように玩具・装身具・数珠等が販売されていたらしい。オイレンブルクは日本人から説明を受けたのか、それらが土産物であることも知っていた。

ところで、近世の浅草土産はどのような品があったのか考えてみたい。江戸に住む者ばかりではなく、旅行者も訪れる場所であるから、仲見世で買えるような気軽な品以外に、もう少し高額の、しかし浅草ならではのものもあったはずである。

『江戸買物獨案内』に掲載されている浅草の店で、最も数の多い業種は菓子屋で十二店ある。この十二店中、高砂屋・虎屋竹翁軒・よもんやの三店が粗糲を商っている。現在でも「雷おこし」は浅草土産としては一般的なもので、これは当然と言えるだろう。

次に多いのが薬屋で十一店を数える。この中で最も著名なのは勧学屋である。勧学屋大助の万能薬「錦袋圓」は、池之端の店が一般に知られているが、浅草の勧学屋も『江戸名所図会』や『江戸買物獨案内』に掲載されていることから、池之端ほどではないが繁盛していたと思われる。その他、とらやの「万病圓」、吉野屋の「順気陥胸散」のように京都からの出店、片山氏の「墨唾設印メセデイン」と称する蘭薬等、必ずしも江戸のものばかりではないが、他の地域では手に入りにくい薬品が販売されていた。

薬品・菓子に次いで数の多い業種は鼻緒店で七店、それに、人形店・筆屋・袋物屋がそれぞれ五店見られ

る。案内に載っている数は四店に過ぎないが、やはり注目すべきは浅草海苔だろう。江戸における海苔の名店六店のうち四店が浅草にあるということは看過できない。また、浅草寺別当は寛永寺輪王寺宮が兼任することが慣例となっていたため、浅草海苔店四店のうち三店が「東叡山御用」と寛永寺との関係を謳っている点もいかにも浅草らしい。やはり、浅草のブランド力は浅草寺あつてのものであったと言える。

5. 総合施設としての浅草寺

門前町とは寺院を中心に形成された町である。その始まりは祭礼の際に開かれた市であり、それが常設化した結果、町になったものである。しかし、常設化するにあたっては、日常的に利益を生む業種の店舗が立ち並ぶ必要がある。その性質上、数珠・線香・仏具といった宗教的行為に関連のある物品を扱う店が必ず混在する点では一般的な商店街とは趣を異にするが、縁日の露店と比較すれば、いわゆるハレとケ²⁷の別ではケの世界に属する商品の比率が上がるのが当然である。

ところが、浅草はケの空気が極めて薄い特異な空間を形成していた。これは、臨時開帳や縁日等の催しが頻繁に行われており、本来ハレの日に属すべき祭礼が日常化した状態にあったことが最も大きな理由である。前述したように本尊開帳の頻度も高く、一度厨子が開かれれば五十日から六十日程度開帳期間があるのが常であり、また開帳以外にも三社祭²⁸、四万六千日（ほおずき市）、歳ノ市、追儺²⁹等行事には事欠かない。その上、境内に末寺が三十四、稲荷・弁天・不動等の堂が百六十以上あったことを思えば、いつも何かしら小さな行事は行われていたはずである。

来訪者の側から見ると、いつ行っても何かしら行事に出会える可能性の高い浅草寺は、いつでも思い立ったら行って楽しめる都合の良い場所であった。そのため、多くの参詣者がありながら、その数は適当に分散されていた。三社祭や歳ノ市のような期間の短い大きな祭礼の際は別として、普段は人々が一斉に押し掛けるような状態ではなく、賑やかではあっても不快にはならない程度の混雑ぶりが日々繰り返される。そして、本堂で手を合わせた後は奥山や仲見世で楽しむ。参詣者は一箇所に止まり続けることはあまりなく、時間的にも空間的にも意図せずして交代制がうまくできていた浅草は、近代的な娯楽空間を形成していた。

近世中期頃には、浅草寺境内は宗教的空間とは言い難い場所になっていた。もっとも、それは浅草寺に限ったことではなく、ほとんどの開帳場に言えることであつたようだ。十方庵敬順は「作りもの見世物の引立

に依て開帳へ参詣する者は畢竟見世物の序に参拝するに同じ³⁰と嘆いている。元々庶民は現世利益を求める傾向があるので、この頃信仰の対象としては痘瘡神・稲荷等所謂流行神が注目を集めていた。そのため、参拝者があまりにも少なく、帰路の路銀にも窮するような出開帳もあった。そのような中で聖俗が隣り合わせに並び立つ道を選んだことが、浅草寺を中心とした浅草の繁栄へと繋がった。

行楽や遊興のついでに拝むというのは、敬虔な信仰心とは程遠い。それに甘んじているのは、表面的には浅草寺の墮落した姿と見える。しかし、人々のあるがままを受け入れ、庶民とともに在る「浅草の観音様」が確立されたのは、むしろこの時期であった。谷崎潤一郎は、「其処には何か新しい文明の下地となるべき盲目な蠢動がある。盲目ではあるが、蠢動ではあるが、それを軽蔑する者は民衆を軽蔑するのである³¹と評しているが、谷崎の感じた「浅草」は既に芽吹いていたのである。

6. 結

江戸は何もない土地に人工的に作られた都市である。広い湿地に治水工事を施し、土を盛り、建築可能な状態にして作り出した町なのだから、開府以前は何もない。そこに徳川氏が幕府を開き、事実上の首都とした。初めから行政上の実際的な目的で生み出された都市である。

したがって、最初に述べたように、自然の生み出した美しい景観や歴史の重みを感じさせる眺めなど、近世の江戸にはなかったものだと言える。しかし、人は衣食住が整えば満足できるものではない。精神的な意味で「遊び」は必要なものである。富裕層であれば、自家専用の遊び場あるいは貴族仲間での遊興場を維持していけるであろうが、庶民にはそれは不可能である。そこで遊興の場を提供するビジネスが成立することになる。

江戸の庶民文化の中で、浅草が町ぐるみ娯楽施設の様相を呈するようになっていく。その流れを浅草寺の世俗化と見られるのもやむを得ない面もある。参詣者の宗教心の希薄化、寺院の金銭的利益の追求といったマイナスの側面は確かに否定できるものではない。だが、逆に気軽に参拝できる、幾とおりの楽しさを味わえる、何度行っても新鮮味があるといった意外なプラス面があったことも確かである。

都市の利点は、短時間でいくつもの用務が片付けられる時間的なロス少なさにある。それならば、娯楽についても同じようにするのも悪くはない。おそらく

無意識にはあろうが、密度の濃い時間の使い方をする江戸っ子気質が、この浅草の発展に関係していると思われる。仏教的な雰囲気も、町の賑わいも、時には公方様との一体感も、いろいろなものを少しずつ味わう。それが可能にしたのが浅草という町であった。

1 梅若丸という美少年が人買いに攫われて奥州へ売られていく途中、隅田川の辺で病死したという伝説。その母が狂いながら子を探す姿が謡曲「隅田川」や浄瑠璃で描かれている。

2 諸宗山無縁寺回向院。東京都墨田区両国二丁目にある寺院。浄土宗。生あるもの全ての回向のための寺院。無縁仏、刑死者、動物の回向も引き受ける。

3 金龍山浅草寺。東京都台東区浅草二丁目にある寺院。聖観音宗。元は天台宗であったが、昭和二十五年(1950)聖観音宗総本山として独立した。大化元年(645)の開基と伝えられており、都内の寺院では最古とされている。

4 斎藤月岑『武江年表』は江戸・東京の地誌で、天正十八年(1590)から明治六年(1873)までの主な出来事が記録されている。正編が嘉永三年、続編が明治十五年に刊行されている。

5 『武江年表』天保十一年(1840)の条に「十月十三日、浅草寺本堂修復成就にて今夜酉下刻、本尊念仏堂(本堂普請中本尊は此堂に安置し奉る)より遷座あり(遷仏の間は惣門を閉し、講中の外入る事をゆるさず)終わりて暫時開帳あり。道俗群集す」と記されている。

6 上野御兼帯以来
御成御膳所之留書
大御所様

寛延二年巳三月廿五日
右忝度ニ而御座候

公方様

大納言様ニ而被為成候節

寛保元年酉五月廿六日 同年七月十五日

右大将ニ而被為成候節

寛保二年戌五月朔日 同年七月十五日

寛保三年亥四月六日 同年七月十五日

延享元年子四月四日

公方様ニ而被為成

延享三年寅四月廿二日 同年七月十五日

延享四年卯四月十六日 同年七月十五日

寛延二年巳四月七日

寛延四年未四月廿一日

都合拾三度

大納言様

延享五年辰閏十月四日

寛延三年午十月七日 同年十一月十六日

同四年未九月廿八日

宝暦四年戌六月十五日 同五年亥六月四日

同六年子五月六日

都合七度

- 7 浅草寺では七月十日の参拝は、一千日分の功德になるとされていたが、享保年間頃から「四万六千日」と呼ばれるようになり、その名のとおりに四万六千日分の功德を一日で積めると言われるようになった。そのため、誰よりも早く観音菩薩と縁を結びたいと望む人々が前日の七月九日から浅草寺を訪れるようになり、やがて九日十日両日が四万六千日と受け止められるようになった。また、この両日はほおずきの露店も並ぶため「ほおずき市」としても知られている。
- 8 毎月十八日が浅草寺聖観音菩薩の縁日である。
- 9 鹿島社 祭神・武甕槌神。雷神、剣の神、相撲の神。
- 10 秋葉社 祭神・秋葉大権現。火除け、火伏せの神。
- 11 弁財天 財宝神。
- 12 磯辺大神宮 祭神・天照大神。
- 13 妙見社 祭神・天之御中主神。
- 14 地主神 所謂稻荷ではなく、元来の祭神は大国主神であったと思われる。
- 15 韋駄天 護法神。小児の病を除く神。
- 16 山王社 祭神・大山咋神および大物主神。豊穰の神。
- 17 被官稻荷社 安政元年(1854)、浅草十番組を組の頭・新門辰五郎が妻の病氣快癒の御礼にと、伏見稻荷神社から祭神御分身を勧請し、社を創建、被官稻荷神社と名付けた。名称の由来は不明。
- 18 山崎美成『江戸名所独案内』弘化二年(1845)序
- 19 Friedrich Albrecht Graf zu Eulenburg (1815—1881)
- 20 オイレンブルク著・中井晶夫訳『オイレンブルク日本遠征記』雄松堂書店 1969年1月)
- 21 前掲書
- 22 Johann Ludwig Heinrich Julius Schliemann (1822—1890) プロイセンの考古学者。トロイ遺跡発見で著名。日本には世界一周旅行で立ち寄った。
- 23 シュリーマン著・石井和子訳『シュリーマン旅行記 清国・日本』(講談社 1998年4月)
- 24 奈良茶飯は、米に大豆・小豆・粟・粟などの穀物と季節の野菜を加え、塩や醤油で味付けしたほうじ茶で炊き込んだものである。日本の外食文化は、この奈良茶飯から始まったとされている。売り出したのは浅草寺近くの店で、時期は明暦の大火以降と伝えられる。
- 25 オイレンブルク著・中井晶夫訳『オイレンブルク日本遠征記』雄松堂書店 1969年1月)
- 26 シュリーマン著・石井和子訳『シュリーマン旅行記 清国・日本』(講談社 1998年4月)
- 27 柳田國男によって見出された日本人の世界観で、「ハレ」は祭り・儀式・行事などの非日常、「ケ」は普段の生活を指す。
- 28 三社祭は浅草神社の祭事であるが、神仏分離以前は同社は浅草寺と一体であったので、別名「観音祭」とも呼ばれていた。
- 29 追儺は「鬼やらい」とも呼ばれ、現在の節分に相当する行事であるが、本来立春前夜に行うものであったため、浅草寺では大晦日の行事であった。
- 30 十方庵敬順『遊歴雑記』敬順は文化九年(1812)に隠居して以降江戸ならびにその近郊を訪ね歩き、自分

の見聞きしたことを書き残している。

³¹ 谷崎潤一郎「鮫人」(『谷崎潤一郎全集』第九卷 中央公論社 1958年)